大西巨人の小説における感覚表現について

桒原 丈和

はじめに

小説家大西巨人の小説・エッセイは、自身のものも含めた古今東西の様々な散文・韻文が引用されている。代表作である長篇小説「神聖喜劇」（1980年完結）を初めとして、それ以降に書かれた短篇小説・長篇小説いずれも自他を問わない様々な引用文とそれに対する言及が小説の中で大きな役割を担っている。そのため、これまで大西巨人について論じたものの中には、小説中で引用が行なわれている意味について論じるものも多かった。本文に書かれた登場人物の思考と引用文との関係から、大西巨人の文学思想や政治思想を明らかにする、というのが、これまでの論の主流であった(1)。

それに対して本論で試みるのは、大西巨人の小説本文に出て来る感覚表現の特質や役割と、時代を追った変化についての分析である。

出発点となるのは最初にあげた「神聖喜劇」である。私の担当する大学院総合文化研究科日本文学専攻の創作・批評特論1B（2015年度後期開講）では、「神聖喜劇」を講読し、履修した院生に自身の見出したテーマで発表をさせた(2)。そこで各々が担当した箇所に基づいて提示されたテーマに示唆を受けながら、「神聖喜劇」全体および「神聖喜劇」に前後して発表されている他の小説についても関心を広げたのが本論文ということになる。

「神聖喜劇」について、私は既にそこで描かれた身体について近代国家における規律・制度との関連から論じているが、野砲教練を通した身体の馴致についてはふれたものの、詳細な身体の感覚の表現については取り上げていなかった(3)。また、大西巨人の小説全体については、たとえば最晩年の「深淵」(2004年)(4)についての批評における「大西巨人ほどエロティズムについて問題的な作家はそうはいない。(略)「神聖喜劇」を読んだ者なら、そこに描かれている高名な「剃毛」性交の場面を想起して、ある程度、納得するところがあるに違いない」という絓秀実の指摘もある(5)。「エロティシズム」をテーマとして取り上げている以上、様々な身体の感覚を描かざるを得ないわけであり、実際後で紹介するように男女の性交やその前後を描いた場面も多い。では、それらの身体は小説の中でどのように描かれているのか、表現の特質や変化について調査する意味は確かにあると考える。

詳しくは後述するが、調査の結果によると、実は大西巨人の小説では視覚・聴覚以外の感覚に基づいた表現は非常に少ない。引用によって多様な言語を豊かに収集している大西巨人の小説が、一方で感覚表現においては特に触覚・嗅覚・味覚などにかかわる表現を抑制して用いないようになっているのだが、その変化はどういう結果を及ぼしているのか。その点を明らかにした上で、あらためて、本文と引用文との関係を論じていくことになる。

「神聖喜劇」の感覚表現

2015/11/24に行なわれた創作・批評特論1Bにおいて、修士課程一年井上雅宏は「神聖喜劇」第二巻・第三巻に登場する食事にかかわる場面を取り上げ、「酒保」の充実へのこだわりや餡入り餅への熱いまなざしが語られているにもかかわらず、食物の味についての表現が欠落していることを指摘した。さらに味覚の表現だけではなく、嗅覚の表現も欠落していることを示すべく、他の戦後文学の表現と比較を行なった。また2016/1/12日の回では、前の発表を引き継いでその後の箇所での食べ物、嗜好品、体温、匂いがどのように描かれているか、という観点から特徴のある箇所を取り

出した。

それらの発表に示唆を受けて、私は詳細に「神聖喜劇」（400 字詰原稿用紙 4700 枚）の引用文を除く本文全体における視覚・聴覚以外の感覚、すなわち味覚・嗅覚、それに二つの感覚の基盤となる触覚、また体全体にかかわる感覚についての表現を調査した。前述のように、視覚・聴覚に基づく表現に比べるとかなり少ないことが明らかになった。以下の引用のうち、波線部が感覚を直接表現する箇所であり(6)、引用の前の数字は巻数 - 頁数を示している。

味覚

1-465　私は、紅饅頭を手箱に入れ、白饅頭を味わいながら、

3-51　私は、次ぎに主婦が持ち出した別の盆一枚の上を見て、思わず息を呑み、さらに思わず生唾を呑み込んだ。

4-183　酒も天麩羅もお田も、「案外」なかなかおいしかった。

4-184 「さくら」は、とりわけ美味な（私の口にすこぶる合った）澄ましを出した。

5-440　牛の剝き焼き、鯣烏賊の湯引き、鯛の洗いなどは、実に兵隊私にとって久しぶりの美味珍味であった。

飲食したことを伝える記述自体は他にもあるものの、食べたものの味について直接言及しているのは後の三つだけである（一つ目についても、「味わう」にはうまさを感じて楽しむ、という意味があるので含めてもいいかもしれない）。二つ目については味覚からは外れるが、食べ物に対する身体の反応として示している。

嗅覚

1-252　大根汁は、一種特異の臭気を放った。

1-435　私の鼻は、人肉の焼け焦がれる臭気のただよいを、うつつに嗅いだのである。

1-435　かつて人肉の焼け焦がれる臭気を確認したことのなかった私がそこでかりそめに嗅いだと思ったのは、実は私の記憶における火葬場の臭いなのであった。それだから、その正体が、人肉の焼け焦がれる臭いなのか、焼香の香りなのか、その両方の混合なのか、い

ずれとも私は、明らかには承知していなかった。しかし私の感官にとって、火葬場の臭気は、すなわち人間の丸焼きにせられるそれにほかならなかったのである。

1-440　私は、そこの異様な臭気からだけ、ひどい刺戟を受けた。人間の焼ける臭い、と私は思ったが、それは全然そうではなかったのかもしれない。

1-443　私は、あの異臭を人が焼ける臭いとしてふたたび嗅ぎ、

匂いの記述は、第二部と第三部で話題の中心になっている「軍事機密」の大根と、同じ箇所で出て来る大前田軍曹の大陸で人体を焼いた体験にまつわるものに限定されており、第二巻以降には出て来ない。体臭や食事の匂いについての記述も無く、第二巻第三部「第二　十一月の夜の媾曳」では絓秀実が言及していた「「剃毛」性交」も含めた男女の生々しい性交前後の場面が続いているが、匂いについての記述は皆無である。

触覚

1-12　刺すような北風が、しばしば波の繁吹きを孕んで、私の面を打った。

1-37　夜半に私が目醒めて厠に立ったときには、つめたい雨が降りしきっていたが、

1-86　早くも月の落ちた営庭の夜は、冷ややかな風の流れを湛えて音もなくひたすら暗く、

1-466　真冬とはいえ、大気は夏蜜柑色の陽光を存分に孕んで生暖かく、

2-224　彼女（の屍体）がだんだん冷えてくるのを私の膚に感覚しつつ抱きしめて愛撫していて、ついに彼女の冷え切った屍体をなおいつまでか抱きしめて愛撫しているのではなかろうか。

2-235　薄ら寒さが、私の背筋をじわじわ這った。

4-320　私は、彼女の「ほのかに冷えし肌のかなしさ」とその肌がようやく火照ってくるのとを私の五体に感じ取った。

5-446　その途中、両頬の内側で肉が歯に切れ、ぬらぬらしたあげく、血が口外に泡立って噴き出た。

「神聖喜劇」が描いているのは冬の時期なので、冷たさ（また逆に冬らしくない陽光の暖かさ）を感じる表現が第一巻・第二巻の第三部に多く出て来ている。しかし、第二巻第四部以降は寒さや冷たさ、それに暖かさが表

現されることはない。東堂太郎が環境に慣れたということもあるかもしれないのだが、終盤は既に春と言っていい時期に入るものの、暖かさを伝える記述はないので、あえて表現していないのではないかと考えられる。

数少ない終盤での触覚の表現の中で印象的なのは、最後の第五巻における大前田軍曹による体罰の場面、執拗な殴打の結果、口内を流れる血の感触である。

体感覚

1-79　私の浴場行きの目的ないし楽しみは、むしろこの冷水浴にあった。めったにない清潔な爽快感が、ほとんどこのときにだけ私の身内を洗い流れるのである。

1-236　耐えて相手の目を見返してきた私の五体を、かすかな戦慄が、そのときつたわった。

2-34　私は、いささか赤面しつつ理解した。

2-57　『もう第一班も第二班も食器洗いに行っているというのに、おれたちはいったいどうなるのだろうか。腹も減ってたまらんが。』という卑近な気がかりに改めて襲われもしたのである。

2-278　毎朝食後の定例行事を今朝は取り込みのために済まし得なかった私の便意（大）も彼らの申し出に刺戟せられてか、急にやや強く動き始めた。

2-291　私は、私の便意（大）が最終的に高ぶって来るのを感じた。

5-485　船体のわずかな縦揺れの律動が、私の五体に、いっそこころよかった。

ここで体感覚として取り出しているのは、視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚という分類にはあてはめにくい、身体の内部で感じた感覚や身体全体で受けとめた感覚を表現した箇所である。五感という分類自体が、複雑に混じり合った身体の感覚を言語化するための便宜的なものなので、当然分類しきれずにこぼれる感覚があるわけだが、その分生々しい、より身体性の強い表現になっている。多様な身体の感覚が表されているが、嗅覚・触覚と同様にほとんどが第二巻第三部までに出て来ており、唯一の例外が小説全体を締めくくる箇所にある、内務班勤務からの解放感も伴っている移動中の船上での身体の揺れである。

ここまで取り出してきた表現には、小説内の現在時に感じているものと過去の回想の中で感じているものがあり、また、実際に感じたものと、実際には存在しない（ある緊迫した状況で感じられた）幻臭のようなものも含まれている。本文中に言葉として出て来ているということを重視し、感覚を引き出す現象の現在・過去および実在・非実在については考慮しないことにしている。

さて、以上のように味覚・嗅覚・触覚、それに身体全体にかかわる感覚表現が欠落しているという訳ではないのだが、400字詰原稿用紙7400枚に相当する長篇小説の中に出て来る数としては非常に少ないと言っていいだろう。更に言えば、味覚を例外として、二巻以降では一巻よりも視覚・聴覚以外の感覚表現が少なくなっている。味覚は、一巻では一箇所だけ、その後三巻で一箇所、四巻で二箇所、五巻で一箇所出て来ているが、それにしても頻出するというわけではないし、また三巻は前にふれた餡入り餅が登場する箇所で具体的な「甘い」「旨い」などの表現があるわけではない。

「神聖喜劇」は東堂太郎が語り手になっており、彼が戦争中に見聞したことを戦後になって回想して語るという設定になっている。そのため、様々な感覚を通して感じたことを彼自身が取捨選択した上で表現にしたものが本文をなしていることになる。つまり、東堂太郎はあえて見たこと聞いたことを中心に彼の体験を語り、より身体的な味覚・嗅覚・触覚・体感覚については表現を抑制していることになる。

「神聖喜劇」の感覚を用いたメタファー

前出の2015/11/24の発表では、実際に感覚で受けとめたものについての表現が少ない一方で、たとえば吉原の食べ物のある場所に顔を出す抜け目の無さを「嗅覚」と呼ぶような、メタファーの表現はいくつか用いられている点が指摘されてもいた。そこで味覚・嗅覚・触覚・体感覚を用いたメタファーについても小説全体の調査を行なった。ここで言うメタファーは類似に基づく喩えのことで、いわゆる直喩（明喩）と隠喩（暗喩）を区別していない。以下に示すが、二重波線部が感覚を直接表現する箇所である。

なお、味覚をメタファーに用いた表現は無かった。

嗅覚

1-43　私の嗅覚は、目の前の事態に何か理不尽な物が隠れ潜んでいるらしいのをぼんやり嗅ぎつけていたようである。

1-236　という生臭い警告を、私は聞き取った。

1-315　なにさま内証事のような・臭い物に蓋をするような・吹っ切れないような・いかがわしい色調を帯びていたではないか……。

1-494　なんとも内証事のように、臭い物に蓋をするように、いかがわしい効果を伴った。

2-31　私は、若げの生臭い気取りか演技の臭いを嗅ぎつけたという気がして、

3-55「飲食物の存在について、ある種類の獣――犬か何かのように嗅覚が異常に発達しとって、そういう場面には抜け目がなく現れる、というような人間。まぁ、『嗅覚』というのは、物の喩だがね。（略）」

3-57･58　その事実を彼らに洞察せしめたのは、あるいは彼らにおける鋭敏な「嗅覚」の働きであったかもしれない。

5-44　鉢田は、（略）それを例の「嗅覚」によって「トウネエウサンキュウナ」事象と把握したらしい。

多いのは言語化しにくい直観を「嗅覚」に喩える慣用的な表現、三つ目と四つ目は被差別部落出身者についての上官の不審な態度を表すためにことわざを用いた箇所であり、独自と言えるメタファーは二つ目と五つ目の「生臭い警告」「生臭い気取りか演技の臭い」だけであるが、それもありふれた言い回しではある。

触覚

1-46　つめたい恐怖が初めて私の胸を走った。

1-124　いやでもその動きが目に入る私は、むず痒いような、くすぐったいような感覚に襲われて困った。

3-63　室町の無邪気であるにちがわぬ言葉が、私の心に錐（きり）のように食い込んだ。

4-431　堅実な手応えが私の手にあったとはいえ、私は、その成り行きにたいして半信半疑

の気持ちでいた。

5-400　依然として重苦しげなしめっぽさが、第三内務班ないし新砲廠三個班を取り籠めていた。

第四巻と第五巻の二箇所については、実際の「手応え」や「しめっぽさ」ととらえることもできる箇所なのだが、判断が付きにくいのでメタファーに含めた。明確にメタファーと言えるのは残りの四つだけである。

体感覚

1-104　なんとも陰惨な空気が第三内務班に充満しているのを、私は、全身で感じ取った。

1-236　大前田から突きつけられたあやしげな御託の真意を、私の頭は、なにか痺れるような感覚に浸されつつ、いたずらに追い探り、たずね求めていた。

3-39　おそらくそこから、私に、ある恐れのような・悪寒のような情感が、襲来していたらしかった。

4-321　私は、目を閉じ、そのみなぎる水のような物に意識感覚のすべてを言わば「陶然と」委ねていた。

5-28　自己分隊の実弾発射から、私は、格別の衝撃を与えられなかったとはいえ、一種特異な・なかなか曰く言いがたいような・新鮮などちらかと言えばすがすがしい感覚を味わわされた。

体感覚については更にメタファーと実際の感覚の区別がつきにくい。前の三つは軍隊生活で強権に対して抱いた不快または不安な感情を表し、後の二つは性的な昂揚感と大砲の発射に伴う爽快感を表されている。後者は、第四巻と第五巻に分かれているが、記述としては文庫本で200頁も離れていないし、銃砲についての表現が性的なメタファーに使われることが多いことからすると、一繋がりのものと考えていいかもしれない。

前節とこの節で紹介した調査結果から、「神聖喜劇」序盤は視覚・聴覚以外の感覚に基づく表現があるものの多くはなく、中盤・後半でほとんど見られなくなり、その代わり非常に印象的な用いられ方をしている、という

のが明らかになった。

確かに、「神聖喜劇」自体が長い時間をかけて書かれている小説なので、前半と後半で表現の性質に違いが出ていてもおかしくはない。成立の状況を参照すると、1978年から1980年にかけての完結の前に、一度全三巻本の形で、第一部から第三部まで（完結したものでは第一巻・第二巻の半ばまでにあたる）が1968年から1969年にかけて刊行されている。そこでまとめられた第一巻・第二巻と、現在の第三巻以降にあたる箇所とは書かれた時期が異なっており、その時間差が表現の差になっているのではないか、と考えられる。

そうだとすると、さらにここで指摘した「神聖喜劇」序盤と中盤・後半との間に見られる表現の変化は、大西巨人の小説全体に認められることではないか、ということが次に考えられる。それについて更に「神聖喜劇」以外の小説について調査を行なった。

「神聖喜劇」以前の小説における感覚表現

大西巨人は「神聖喜劇」の執筆の前に、いくつかの中篇・短篇小説を発表しており、比較のために視覚・聴覚以外の感覚についての表現を調査してみた。ここで取り上げるのは、「精神の氷点」1948年（400字詰原稿用紙270枚）(7)、「白日の序曲」1948年（105枚）(8)、「黄金伝説」1954年（135枚）(9)という、「神聖喜劇」起筆以前に一旦完成していた小説である。これまでと同様に感覚別に抜き出すと以下のようになる。なお、「精神の氷点」は精、「白日の序曲」は白、「黄金伝説」は黄として示した。数字は初出雑誌の頁数。「精神の氷点」には5から7の月号数も記している。

味覚

精5-63　焼けつくような渇きを覚えて目ざめた時、

黄52　やぁ、これは、うまい。まゆみ、この桃はうまいよ。

「神聖喜劇」以前に書かれた小説でも味覚に関する表現は乏しい。かんめ

んぽう（乾パン）やうどんを食べている記述はあるのだが、その味についての言及はない。ここで抜き出した二箇所は、後者は味についての記述ではあるものの登場人物の会話文であり、前者は味覚では無いが「神聖喜劇」の調査と同様に飲食にかかわる身体の反応として取り上げている。

嗅覚

精 5-45　長い間締め切られた家の内には、（略）古い埃の臭いが漂い、

精 5-51　このような瞬間に女性の肉体が放つあの特有のいやな、けれどもなつかしくもある臭気が彼の嗅覚を刺戟し、

精 5-51　おんなの鬢髪が彼の額に冷い感触を保った。

精 5-51　植物性のポマードの香をふと不愉快なものに受け取り始めた感覚の奥で、

白 46　どこからか甘酸っぱい何かの花の匂いが、流れて来た。

白 49　踵を返し、晩秋のものの匂いの濃い若葉の下の夕闇に向って、

黄 67･68　香の匂いと混合した火葬場特有の異臭にも骨ぼとけにもとっくに馴れ、

嗅覚に関する表現は、「神聖喜劇」の四箇所よりも多い六箇所であり、また原稿用紙 4700 枚と三つの小説の合計で 510 枚と分量が随分違うので、比較するとかなり多く出て来ていると言っていいだろう。特に「精神の氷点」は登場人物の感情を大きく動かすものとして匂いが用いられているのがわかる。

触覚

精 5-46　床をのべて横になれば、こうして畳の上にやわらかい夜具の肌ざわりを「地方人」として感覚し得ることの不思議さを思うのだ。

精 5-46　彼の戦友が銃把を握りしめたまま二十ミリの機銃弾を顔面と頭蓋とに二発くらって銃座を朱に染めた時の血のしぶきはまだこの皮膚にしみついているようであり、

精 5-48　夜中はしんしんと肌身に透る寒気とこの頃夜毎のきまりになっている悪夢とに攻められて熟睡のできぬまま朝を迎えると、戸外には夜来の雪が積り、いまは晴れた暁の光に反映していた。目が痛かった。

精 5-49　やがて生温かい、しかし手足の冷えた肉体が彼の横にすべり込むと、乱暴に抱き

しめてくる。

精 5-53　風のうなりと雪の降り始めたらしい気配とが室内の「夜」に波立ちを与え、寒さがきびしくなってきた。

精 5-53　彼を押しつぶそうとする幻覚が彼の全身に冷い震えを生んだ。

精 5-63　彼女の肉体は、既に四度ばかり彼の両腕のなかで細かに震え、受けとめた彼の重量におずおずと耐えてきた。そしてその肉体は彼の体重の圧迫から脱すると、その都度間歇的な痙攣を直後から半時間くらいもびくり、びくりと繰り返したのである。

精 5-64　彼女の肉体のかすかな震えに残忍な喜びを味わった水村も、右腕から五体へと伝わってくる筋肉のひきつりには心を冷やし、

精 6-52　彼の頭を彼女の両膝のぬくみで支えて長髪をせつなくかき乱し、

精 7-53　首筋に染む冷さの感覚にふと身ぶるいをして、

精 7-54　ごつり、とした手応えと短いうめきとを残して男は前のめりに地上の雪に崩れ込んだ。

精 7-57　喘ぐ呼吸と高鳴る心悸との五体には、冷い汗がにじんでいた。

白 44　何の歓びも感覚することのない、幼い怯えた肉体のかすかな震えと、固い乳房と硬直した大股部との触感が彼の指先と彼の五体に生き返る、

白 46　晩春のゆうべのなまぬるい風が樹樹の若葉をざわと一ゆすりして、二人のほうにも吹き送って去った。

白 49　下腹部から男根にかけて、嫌な、むず痒い感覚が、一瞬走り抜けていた。

白 51　嫌な感覚が、彼の鳩尾の辺を圧迫するのを感じながら、彼はそのまま暫く俯していた。

白 54　窓外には冷たい晩秋の夜風が流れ、

黄 45　そうして過ぎた一年数ヶ月の間に、彼より十歳以上も年少のこのおさな妻の胸も、ようやく弾力あるふくらみに、しかと彼を受けとめつつあった。

触覚に関する表現は、性交の場面や性病の痛みを伝える際に多く出て来るが、他にも生身の身体を持った登場人物の快・不快を表すものとして数多く出て来ている。

体感覚

精 5-44　凪いだ海を切って進む船体のリズミカルな動揺がまだ肉体をゆすぶり続けているような錯誤を脱しきれない彼の感覚は、

精 5-55　彼は耐えがたい便意を催していた。

精 7-52　その頭脳の冴えは、肉体が凍附く時にも似た一種の疼痛を伴っていた。それは一つの思念――今後数時間内に果さるべき一つの意図に向って集中された脳髄の長い緊張から発する痛みのようであった。

白 53-54　巨大な黒旗のはためきが強烈さを加えるにつれて、彼は彼の胸先を突き上げていた棒のようなものの胸元へ迫り上がる力が、ようやく衰え退くのを感じた。

白 63　その丸刈の彼の感動を削り落とした白皙の顔が、刻々に海峡の町を遠ざかり行く列車の震動につれて微動しながら、

乗り物の「動揺」「震動」や「便意」といった「神聖喜劇」と共通する記述もあり、登場人物の身体が存在していることを強く感じさせる記述が出て来ている。

視覚・聴覚以外の感覚をメタファーの中で用いている箇所についても調査した。

味覚

精 5-52　不毛のオルガニズムの欲望へと転化してゆく、医されることのない渇きの連続とがあった。

精 6-55　のたうちながら彼はそれらの破壊の記録をやみ難く重ねつつ、一つごとにいやまさる魂の渇きに喘いでいた。

白 51　悔恨に似た苦い嫌な感覚が、

白 57　苦い液体が胃から咽喉に上って来たように感じて、彼はごくりと唾を呑んだ。

黄 33　森本は、いたしかゆしというような妙ににがずっぱい顔をしていた。

嗅覚

精 5-48 時代の暗い断層に傷つき疲れた人間観から立ち上がる、どんよりした呪詛の匂いが

こもっていた。

精 6-60　一気にののしり続けた彼が、反吐を吐きつくしたように面を背けて沈黙し、やがてみずから吐いた反吐の臭気と汚穢と、――彼自身に撥ね戻り・彼自身を侮蔑しにくる醜悪と汚辱とに直面し、嫌悪と屈辱とを噛みしめねばならなかった時、

触覚

精 5-47　荷馬車の上から刺すような痛みを耐えて眺めなければならなかった焦土の起伏と無意味な母の死とにゆすぶられ、

精 5-48　深夜の室内に手ごたえもなく消えた声音には、

精 5-53　昔、という言葉が水村宏紀をぐさりと突き刺した。

精 5-56　水村宏紀の熱した頭を冷い恐怖に似たものが貫き通り、

精 6-50　街頭を行く折や男の世界に身を置いた場合には、冷い無感動のうちに潜む破壊的な気魄が人に迫ったが、

精 6-55　彼の精神の奥にうごめく氷のような冷たさの恐怖をさぐりあてた様子であったが、

白 18　彼は彼の内部に暗雲の低く重たく垂れた、冷たい不毛の砂漠を抱いて、三〇年代後半期の学生生活を送り、

白 49　暗い肉慾の熱気が彼の五体の隅々にまで滲み透り蒸れ上っている状態を彼は思った。

白 61　何か憑かれた人のような陰惨な蒸気に熱した精神を乗せた、荒々しい足取で、

白 63　誰一人に見送らせず、冷灰のような心で去ろうとしている、

体感覚

精 5-43　水村宏紀の五体を異様な感情の波立ちが伝うのであった。

精 5-43　この日頃彼の肉体の内部で疼き続ける疵ぐちをかきむしって新しい痛みを加えるのである。

精 5-50　おんなを見るたびに襲ってくる鋭利な痛みが水村宏紀の胸をえぐっていた。

精 5-56　おんなにたいする狂おしい情欲が身内を奔流した。

精 6-63　彼の意識の底には、志保子の手紙のはしばしと素江の自殺とが、滓のように暗く重く残り淀んだ。

白 53　鈍い痛覚に似たものが彼の下腹部の辺から胸元に向って棒のように突き上げて来た。

一つ一つの感覚ごとのコメントは省くが、「神聖喜劇」全体に比べると多く出て来ているメタファーはいずれも生な身体を表すものである。「神聖喜劇」の東堂太郎は徴兵され閉塞した状況で兵士として過しているのに対し、ここで取り上げた三つの小説は戦中・戦後を舞台にしている。そのため時代によって身体が抑圧される程度が違うということもあるのだが、前者は入隊前についての回想も多く、そこでも身体の生々しさを描くことは回避されている。そして、次節で紹介するように、「神聖喜劇」完結後もその傾向は続いているのである。

「神聖喜劇」発表以後の小説における感覚表現

前節で示したように、1940年代および1950年代に発表した小説では嗅覚・触覚・体感覚にかかわる表現が多く見られた。そして、それは前々節で示したように「神聖喜劇」が書かれる過程で減っていった。それでは、「神聖喜劇」以後に書かれ、発表された小説はどの様になっているのか。調査の結果から先に書くと、やはり視覚・聴覚の他の感覚にかかわる表現は少ない。

今回調査したのは、「娃重島(あえしま)情死行　あるいは閉幕の思想」1987年（400字詰原稿用紙440枚）(10)、「三位一体の神話」1992年（1200枚）(11)、「迷宮」1995年（445枚）(12)、「深淵」2004年（1180枚）の四つの長篇小説である。前節と同様に感覚別に分類しているが、嗅覚と触覚にかかわる表現は出て来ない。「娃重島情死行　あるいは閉幕の思想」は娃、「三位一体の神話」は三、「迷宮」は迷、「深淵」は深として示した。算用数字は引用に使用した書籍の頁数。「三位一体の神話」「深淵」については上巻・下巻の別を頁数の前に示している。

味覚

娃86　いったいに男は、食べ物にも好き嫌いが激しかった。

三下-220　サングラスを掛けたまま飲食するのは、どうも味をまずくするようである、と葦阿は感じていた。

迷 204　たいてい雰囲気が落ち着いていて、おおかた料理がおいしかった。
深上 -288　このあたり特産の斉魚（冷凍）ならびに菱の実を、麻田は、なかんずく珍かに賞味した。

最初の二つにあるように、食べ物の味にこだわっている登場人物がいて、またいずれの小説にも飲食する場面があり、特に「深淵」では頻繁に登場人物たちが会食していたりするのだが、味覚について直接ふれている表現はほとんどない。

体感覚
娃 156　日盛りの歩みで、志貴は、かなりの暑苦しさを覚えた。
娃 156　大木群の枝葉が、下午の陽光をさえぎり、蝉時雨と涼しさとが、二人を取り籠めた。
娃 199　彼は、かなりするどい痛みを陰部に覚えたものの、まだ特に何事かを疑いはしなかった。（略）
娃 199　同夜から翌朝にかけて、排尿時における陰茎の疼痛は、ますます苛烈になった。
迷 74　家内は、蒸し暑かったが、
深上 -13　この海辺の旅館への投宿は、昨夕のこと。昨夜は、ずいぶん蒸し暑かった。

六箇所のうちの四箇所が最も書かれた時期の早い「娃重島情死行　あるいは閉幕の思想」に出て来るもので、「三位一体の神話」にいたっては一箇所も出て来ない。後の三つの小説はあたかも身体の無い記号としての登場人物が役割を演じているかのようである。

以上のように、「神聖喜劇」完結以降の長篇小説、合計 400 字詰原稿用紙 3265 枚において視覚・聴覚以外の感覚の表現は非常に限られている。同様にメタファーに関しても、以下のように味覚と触覚が一例ずつしかなく、その用法も間接的なものにとどまっており、新鮮な印象を受けるようなものではない。

味覚

娃 256　志貴は、『飲酒の味と房事の味とは、相似している。どちらも、当事者の年齢増加につれて、量的には反比例的に減少するものの、質的には（当事者の心がけ次第で）正比例的に深化する。』と固く信じていた。

触覚

迷 74　春田の心は、一種の言わば「ひややかな寂寞」の感触をそこから受取ってもいた。

以上のように、大西巨人の小説においては時代を追う毎に視覚・聴覚以外の感覚に基づいた表現が減ってきている。では、その変化によって小説の表現全体が素朴なものになっているかというと、決してそうではない。冒頭でふれた引用文の豊かさが、本文の単純さを補っている、というのは想像しやすいところだが、それについて詳しく述べている紙数は無いので、「神聖喜劇」に絞って引用文における感覚表現についての調査結果を紹介しておく。

「神聖喜劇」の引用文における感覚表現

ここまで大西巨人の小説本文における視覚・聴覚以外の身体感覚の表現についての調査結果を記してきたが、冒頭で述べたように「神聖喜劇」とそれ以降の小説では膨大な引用が本文と拮抗して存在しているのは周知のことである。創作・批評特論 1B では引用されている短歌や対馬民謡も取り上げられたが、ディスカッションの中で本文では余り出て来ない嗅覚・触覚についての表現が、それらの引用には見られることが話題になった。

更に詳細に「神聖喜劇」全体について調査したところ、以下のような結果になった。感覚の表現を用いたメタファーは少なかったのでまとめてしまっているが、ここまでと同様に下線の種類で区別している。また引用文の後に引用元または筆者についての情報を記した。

嗅覚

1-427　粋な花ちゃん飛んで出て／赤い襟章は汗臭い／黄色い襟章が大好きよ／あたしが靴

紐解いてやる（兵隊歌・2-380 でも引用されている）

1-474　文庫より書物を出し給ふ。明け候へば、丁子の香いたしたり。（「葉隠」）

2-114　かなしもよともに死なめと言ひてよる妹にかそかに白粉にほふ（松倉米吉）

2-138　潮騒のゆふ香はぬるく身をそそれ恋ひじとはすれどなぎさ潮さゐ（中村憲吉）

3-288　橘花のいまだ含めるわが少女にかすかなる香を聞くうれひあり（中村憲吉）

3-315　鼻ありて鼻より呼吸のかよふこそこよなき幸の一つなるらし（明石海人）

3-525　暁のさ霧にぬるるさだめにていまこそにほへあめの花原（斎藤茂吉）

4-60　辯香焼カント欲ス幾年ノ意（田能村竹田）

4-67-68　試ミニ壺中ノ酒ヲ酌マンカ／或ハ故人ニ逢フガ如クナラン／才ニ開ケバ香リハ已ニ烈シク／未ダ飲マザルニ色ハ先ヅ醇シ（田能村竹田）

4-82　茶を煮、香を聞き、花を挿け、樹を栽ゑ、竹を移し、間を得れば、（今村孝次『竹田先生百年祭を挙げるに先だちて』）

4-330　菊はただむねにしたしき匂ひかな（宗祇『筑紫道記』）

5-203　備品のどれ一つを見てもさすがに生活文化を誇るアメリカの香が漂ってゐる。（特派員記事『ウェーキ島に上陸して』）

近世の漢詩・漢文における香道に関わる記述や、鼻を欠損しているらしいハンセン病患者の鼻を通る呼気・吸気への憧憬といった、嗅覚そのものが働いている訳ではないものもここには抜き出している。「神聖喜劇」の舞台である兵営の中では、教練の中で身体を鍛え上げることが目指されているが、それ以外の場面では身体性を抑圧されており、それを補うために引用文では生な嗅覚が招喚されていると考えられる。

触覚

1-10　玉なす汗をぬぐひつつ（対馬要塞重砲兵聯隊「聯隊歌」）

2-96　黒髪もこの両乳もうつし身の人にはもはや触れざるならむ（原阿佐緒）

2-419　食はにゃひだるし、身は着にゃ冷やし（対馬民謡「しんき節」）

3-281　耳辺触ルル所ハ総テ情ニ関ル（江馬細香）

3-298　美しく都へ帰る女らの前髪にふれて秋の来しかな（茅野昌栖）

3-298　手を洗ふ水つめたきに今朝の秋や身を省みて虔しくあり（木下利玄）

3-314　更へなづむ盗汗の衣にこの真夜を恋へば遙けしははそはの母は（明石海人）

3-518　猫の舌のうすらに紅き手ざはりのこの悲しさを知りそめにけり（斎藤茂吉）

3-523　汽車のなかに眼にしむ汗をふきにけり必ず友を死なしめざらむ（山木赤彦）

4-66　ひさめ降る大野の浅茅踏分けてぬらす足結は誰か取り見む（牧嵩振）

5-493　いま　芽を吹き出している樹を見ていた／――汗も夢もぐっしょりぬれながら（斎藤彰吾「序曲」）

前にも述べたように「神聖喜劇」では、教練の中で汗をかき身体が触れ合うような描写は無く、大前田軍曹による東堂太郎への体罰を通した接触が例外的に出て来るくらいであるが、引用文では自身の汗や他者の身体の感触が描かれている。現在いる場所で登場人物たちが剥奪された身体性を回復しようとしているのは嗅覚と同様である。

最後に・今後の課題

大西巨人の小説全体を通して描かれている味覚・嗅覚・触覚・体感覚について調査をしたところ、「神聖喜劇」の執筆前の小説から、「神聖喜劇」を経由して、「神聖喜劇」完結後の小説へと経過する中で、それらの表現が減少していくことが明らかにできた。この身体感覚への言及の減少によって、身体の変化を通して示される感情・情緒の変動が伝えられにくくなっていることになる。

前節で述べた引用文についての調査は「神聖喜劇」起筆前および完結後に書かれた小説についても試みてもいるのだが、味覚・嗅覚・触覚・体感覚に関わる表現は非常に少なかった。起筆前の「精神の氷点」等の小説では元々引用文がほとんど無いのだが、完結後の「娃重島情死行　あるいは閉幕の思想」等の小説は「神聖喜劇」に匹敵するほどに多くの引用文があるのにもかかわらず、以下のように一つの長篇小説に一箇所から三箇所程度出て来るだけである（「迷宮」には出て来ていない）。

娃 169　砲身灼け戎衣ににじむ汗しづくみたびの夏を孤島に迎へし

（登場人物志貴太郎作の短歌。視覚による表現として捉えることも可能である）

三上 -182　青酸には一種特有の舌をさすような刺戟的の味あり、また杏仁水または苦扁桃のような臭いがあって、注意深い人であれば異常の臭いに気がつくので、青酸カリをのますときには、ウィスキー、ブランデー、ブドウ酒、リモナーデ、シャンペンの中へつぎこんで、青酸特有の臭いをごまかそうとすることが多い。／数年前、池袋駅付近で、カルピスの中へ青酸カリを入れ、毒殺した事件があったが、これなどもカルピスの味で、青酸カリの異常の味がごまかされたものであろう。（古畑種基『法医学ノート』）

三下 -232　しづもれる名画の匂ひ　ほのぼのと室をおさへて人なき如し（五島美代子『暖流』）

深下 -164･165　おいでたとき、あなたは赤葡萄酒と蜂蜜のようでした。／そしてあなたの味わいは得も言われぬ甘さで私の口を痺れさせました。（エイミー・ローウェル『十年間』）

深下 -168 「君の唇は柔らかいね。マシマロみたいだ」／夫はそれを賞翫して言った。（松本清張『ゼロの焦点』）

深下 -245　薔薇の香や『パリ・モード』めくる指蒼く〔乙女在室〕／水無月を疾く咲き匂へ紫陽花の花　たちわかれ偲ぶゆかりの色もあらなくに（登場人物匿名「A」作の俳句と旋頭歌）

自作の短詩や他作の短歌・小説・ノンフィクションと、引用元の多様さ自体は興味深いが、これだけでは小説の表現への身体性の付加は部分的なものにとどまらざるを得ないだろう。もちろん小説に身体性を持たせなければならないということは全く無いわけだが、以前の豊かにあった表現が失われたのであればその代わりになるものが必要である。それを明らかにするのは別の機会に譲るが、今回の調査の副産物として後の小説になるほど映画への言及が増えていることが明らかになったことを記しておく。大西巨人の小説は時代を経るほどに視覚・聴覚を中心にした表現になっている訳だが、映画とは視覚・聴覚のみに頼ったジャンル・メディアであり、そこに何らかの相関性があるのかもしれない。

注

⑴　近年の主な論文には山口直孝「内破のコミュニズム――大西巨人『神聖喜劇』の基底思考」『社会評論』179 号（星雲社、2015 年）や『大西巨人　抒情と革命』（河出書房新社、2014 年）に採録された諸論文、単行本の論考としては石橋正孝『大西巨人　闘争する秘密』（左右社、2010 年）などがある。

⑵　受講者が取り上げたテーマは以下の通りである。「「虚無」とそれに対する態度」、「石川啄木の引用・シェストフ的不安」、「軍隊言葉の生成・「神聖喜劇」の人権闘争」、「大前田文七（二巻時）の戦争について」、「「劇」は「神聖」なるべからず　〈十一月の夜の嬉曳〉を中心に」、「対馬・鶏知――地名・歴史――」、「第三巻　餅とウドン」「対馬民謡と差別・村上少尉について」「父・東堂国継の残影――第七部　連環の章　〈第二　歴世〉を中心に――」、「軍隊生活と職業威信」、「第四巻――人称・常識・共同体――」、「冬木照美について」、「五巻――匂いと味と温度はどこへ――」、「声と兆し――第八部〈模擬死刑の午後〉を中心に――」「大前田文七と大前田を見て「保元物語」を思い浮かべる東堂太郎についての考察」

⑶　「軍隊と身体――「挟み撃ち」あるいは「神聖喜劇」――」『近畿大学日本語・日本文学』8、2006 年。（下記にて公開している　http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/guntai.pdf）

⑷　公式サイト「大西巨人／巨人館」で 2001 年から 2003 年まで連載後、『深淵』上・下（光文社、2004 年）刊行。引用は単行本『深淵』によるが、ふりがなを省略した。

⑸　絓秀実「さらに、踏み越えられたエロティズムの倫理――大西巨人の場合」『en-taxi』5 号、2004 年。引用は『大西巨人　抒情と革命』（前出）による。

⑹　引用はちくま文庫版（筑摩書房、1991 ～ 1992 年）による。引用に際してふりがなを省略した。

⑺　『世界評論』1948 年 5 ～ 7 月号。同名の中短篇集（改造社、1948 年）に収録され、後にみすず書房から 2001 年に単独で再刊されている。引用は初出雑誌による。

⑻　『近代文学』1948 年 12 月号。後に加筆・修正の上で大西巨人が「連環体長篇小説」と呼ぶ『地獄変相奏鳴曲』（講談社、1988 年）の「第一楽章」として組みこまれ、更にその後には長篇小説『地獄篇三部作』（光文社、2007 年）の「第二部　無限（むげん）地獄」として組みこまれている。引用は初出雑誌によるが、表記を新漢字・新かなにあらためた。

⑼　『新日本文学』1954 年 1 月号。後に加筆・修正の上で『地獄変相奏鳴曲』（前出）の「第二楽章」として組みこまれた。引用は初出雑誌による。

⑽　『群像』1987 年 8 月号。「第四楽章　閉幕の思想　あるいは娃重島（あえしま）情死行」として『地獄変相奏鳴曲』（講談社、1988 年）に組みこまれる。引用は『地獄変相奏鳴曲』（講談社文芸文庫、2014 年）によるが、ふりがなを省略した。

⑾　単行本『三位一体の神話』光文社、1992 年。引用はカッパ・ノベルス版（光文社、1993 年）によるが、ふりがなを省略した。

⑿　『EQ』1994 年 1 月号～ 1995 年 3 月号。引用は『迷宮』（光文社、1995 年）による。